

各関係機関長 殿

香川県農業試験場病害虫防除所長
(公印省略)

平成30年度病害虫発生予報第8号の発表について

このことについて、次のとおり発表したのを送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
カンキツ	貯蔵病害(緑かび病、青かび病)	やや多
キャベツ	黒腐病 べと病 菌核病	やや多 並 やや多
ブロッコリー	黒腐病 べと病 菌核病	やや多 並 並
レタス	灰色かび病 菌核病 斑点細菌病 モザイク病	並 やや多 並 並
ニンジン	黒葉枯病	やや多
野菜、花きの 共通害虫	アブラムシ類 ハモグリバエ類 (トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ) ハスモンヨトウ タバコガ類(主にオオタバコガ)	並 並 やや多 やや多

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

*予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

平成30年度 病害虫発生予報 第8号 (11月)

A. 果樹の病害虫

—カンキツ—

1. 貯蔵病害（緑かび病、青かび病）

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 一般圃場での10月下旬の発生量は平年並であったが(±)、裂果が多かった(+).

(2) 11月の気象は降水量が平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 収穫10~30日前に薬剤防除を行う。

(2) 収穫、運搬、選果時には果実を傷つけないように注意し、貯蔵する前には必ず予措を行うとともに、貯蔵中は貯蔵庫内の温湿度管理に十分配慮する。

B. 野菜、花きの病害虫

—キャベツ—

1. 黒腐病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 冬キャベツでの10月下旬の発生量は多かった。(+)

(2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。

(2) すでに発生している圃場ではカスガマイシンを含む薬剤を散布する。

(3) 降雨や強風の後はできるだけ速やかに薬剤防除を行う。

2. ベと病

予 想 発生量 : **並**

根 拠 (1) 冬キャベツでの10月下旬の発生は認めなかった。(—)

(2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。

(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。

(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

(4) 発病株は放置せずに抜き取り圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

3. 菌核病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 冬キャベツでの10月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 被害株はただちに抜き取り処分する。

(2) 結球開始前から株元に十分かかるよう薬剤を散布する。

—ブロッコリー—

1. 黒腐病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 年内どりブロッコリーでの10月下旬の発生量はやや多かった。(+)

(2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐ。
 (2) すでに発生している圃場ではカスガマイシンを含む薬剤を散布する。
 (3) 害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。
 (4) 降雨や強風の後はできるだけ速やかに薬剤防除を行う。
 (5) 発生の多い圃場では発蕾までに防除を徹底する。

2. ベと病

- 予 想 発生量 : 並
 根 拠 (1) 年内どりブロッコリーでの10月下旬の発生は認めなかった。(－)
 (2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
 (2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
 (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
 (4) 発病株は放置せずに抜き取り圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

3. 菌核病

- 予 想 発生量 : 並
 根 拠 (1) 年内どりブロッコリーでの10月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 (2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
 対 策 (1) 発病株は早期に見出し、抜き取って適正に処分し、直ちに防除を行う。
 (2) 発生の多い圃場には連作しない。

－レタス－

1. 灰色かび病

- 予 想 発生量 : 並
 根 拠 (1) 12月どりレタスでの10月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)
 (2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
 対 策 (1) 発病株は早期に抜き取って適正に処分し、直ちに薬剤防除する。
 (2) 定植7～10日後と25～35日後を基幹防除時期として薬剤防除を行う。
 (3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 菌核病

- 予 想 発生量 : **やや多**
 根 拠 (1) 12月どりレタスでの10月下旬の発生量はやや多かった。(＋)
 (2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
 対 策 (1) 発病株や残さを放置せずに処分する。
 (2) 灰色かび病防除に準じて対策を実施する。
 (3) 灰色かび病の耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. 斑点細菌病

- 予 想 発生量 : 並
 根 拠 (1) 12月どりレタスでの10月下旬の発生は認めなかった。(－)
 (2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。
 対 策 (1) 育苗は風当りの弱いところで行い、できるだけ傷をつけないように管理するとともに、軟弱徒長にならないよう注意する。
 (2) 圃場の排水を良くする。
 (3) ベたがけ被覆しているところでは、降雨が続くと多発するおそれがあるの

で注意する。

- (4) 強風を伴う降雨が続いた後には薬剤防除を実施する。また、結球期から収穫期にかけて発病が増加するので、下葉に発病が見られたら早めに防除する。

4. モザイク病

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 12月どりレタスでの10月下旬の発生は平年と同様に認めなかった。(±)

(2) 12月どりレタスでの10月下旬のアブラムシ類の発生は認めなかった。
(-)

(3) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での10月のアブラムシ類の誘殺数は過去7か年に比べやや多かった。(+)

対 策 (1) 発病株は早期に抜き取り適正に処分する。

(2) アブラムシ類の防除を行う。また、定植時には、アブラムシ類を対象に粒剤または灌注処理をする。

—ニンジン—

1. 黒葉枯病

予 想 発生量 : **やや多**

根 拠 (1) 10月下旬の発生量は多かった。(+)

(2) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 病斑が上位葉に進展している場合には薬剤防除を行う。また曇雨天が続くような場合には追加で防除を行う。

(2) 肥料切れに注意し、株の勢いが衰えないように栽培管理する。

—野菜、花きの共通害虫—

1. アブラムシ類

予 想 発生量 : 並

根 拠 (1) 10月下旬の発生量は年内どりブロッコリーではやや少なく、冬キャベツ、12月どりレタスでは発生を認めなかった。(-)

(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での10月の誘殺数は過去7か年に比べやや多かった。(+)

(3) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 乱反射資材や防虫ネットを張るなどして、侵入防止対策を講じる。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. ハモグリバエ類 (トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ)

予 想 対象作物: キュウリ、トマト、ミニトマト、ナス、ニンジン、キクなど
発生量 : 並

根 拠 (1) 10月下旬の12月どりレタス、ニンジンでは発生を認めなかった。(-)

(2) 11月の気象は気温が高い予報である。(+)

対 策 (1) 育苗床や施設栽培では、防虫ネットを張るなどして侵入防止対策を講じる。

(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。

(3) 摘葉した残さや収穫終了後の茎葉は、圃場外に持ち出すなど適正に処分する。

(4) 施設の発生圃場では、栽培終了後、後作まで20日以上何も植えず施設を密閉し、成虫を絶食により死滅させる。

- (5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ハスモンヨトウ

予 想 発生量 : **やや多** (平成30年9月13日付け注意報第5号発表)

根 拠 (1) 10月下旬の発生量は冬キャベツ、12月どりレタスでは発生を認めず
(-)、ブロッコリーでは平年並であった(±)。

(2) フェロモントラップでの10月の誘殺数は多かった。(+)

(3) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) ふ化後間もない幼虫は集団となって食害し、その後周囲に分散するので、
初期の食害発生に注意し、卵塊や幼虫集団は見つけしだい捕殺する。

(2) 育苗床では防虫ネットで被覆するとともに、施設栽培の場合は開口部を防
虫ネット(4mm目合以下)で被覆する。

(3) フェロモントラップの誘殺状況や圃場内での本虫の発生に注意し、適期に
防除を行う。

(4) 幼虫集団が食害した後は、表皮だけを残した白変葉となるか、葉脈だけを
残した状態となっているので、圃場内でこれらの葉を多く見つけたら、直ち
に薬剤防除を行う。

(5) 薬剤の効果が高いのは体長1cm程度までの幼虫であるので、早期発見に努
める。

(6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. タバコガ類(主にオオタバコガ)

予 想 対象作物 : レタス、キャベツ、ブロッコリー、ナス、ミニトマト、
トマト、キク、カーネーションなど

発生量 : **やや多** (平成30年9月5日付け調査速報第4号発表)

根 拠 (1) 10月下旬の発生量は冬キャベツでは発生を認めず(-)、12月どりレタ
ス、ブロッコリーでは平年並であった(±)。

(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでのオオタバコガの誘殺数は過去7か
年に比べて多かった。(+)

(3) 防除員報告では、丸亀市飯山町のフェロモントラップでのオオタバコガの
誘殺数は多かった。(+)

(4) 11月の気象は気温が高く(+)、降水量が平年並(±)の予報である。

対 策 (1) タバコガ類の幼虫は、作物の果実や生長点付近の茎葉、花蕾に潜り込んで
加害するので、その周辺を中心に幼虫を探して、見つけ次第捕殺する。

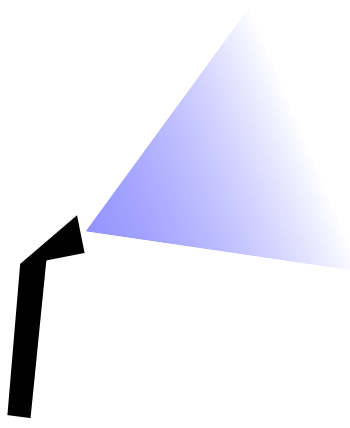
(2) 施設栽培の場合は、開口部を防虫ネット(4mm目合以下)で被覆する。

(3) 被害果実、被害茎、収穫残さなどは放置せず圃場外へ持ち出して処分す
る。

(4) 圃場内及び圃場周辺の雑草は増殖源になるので、除草に努める。

(5) 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低いので、早期発見に努め、防除効果の
高い若齢幼虫期に薬剤散布を行う。

(6) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。



近隣農地の作物等や住宅地等での農薬飛散防止の注意が必要です。
風の状況を確認し、飛散の恐れがあるときは散布作業を中止しましょう

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病虫害防除所インターネットホームページ
URL: <http://www.jppn.ne.jp/kagawa/>